



四旬節第4主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

書かれていない兄の「その後」

四旬節第4主日はよく知られている「放蕩息子のたとえ」です。弟には本来あるべき状態から離れたときに、本来の状態に戻ってくるようにと呼びかけられています。兄には、本来の場所にいる有り難さを今まで以上に自覚するようと呼びかけられています。今年は、兄に呼びかけられていることに重点を置いて考えてみたいと思います。

いよいよ月曜日から小教区の黙想会が始まります。説教師は大阪大司教区の酒井補佐司教様です。「司教様をどうやって呼ぶことができたのですか？」と聞く人がいましたが、司教様の方から声がかかったのです。私の力ではありません。

酒井司教様が長崎でオプス・デイの経営する学校の先生をしていたときは、よく硬式テニスで火花を散らしていました。たくさんのテニスの思い出があったので、黙想会期間中も昼休みに田平公園でいかがですか？とお誘いしましたら、「残念！私はテニスから離れて、ラケットもシューズも手放しているのです」との返事でした。もちろん黙想会が第一の目的ですが、懐かしい記憶をよみがえらせる楽しみが一つ減りました。

さて、「放蕩息子のたとえ」については、細かい説明は必要ないでしょう。もちろん細かい部分に目を向けることで、より鮮明になる効果はあります。

たとえば、兄は父に「あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」(15・30)と不満をぶつけると、父は兄に「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」(15・32)と兄の心の目を開かせようとしています。このやりとりを気づいているのと気づかないでは物語を味わうのに大きな差が出てくるでしょう。

細かな点が与えてくれる気づきを踏まえた上で、大きな視点で私は次の疑問を解決したいと思いました。この物語は「放蕩息子」が登場しますが、物語の最後には登場しなくなります。父親と、息子のうち忠実であり続けた兄とのやりとりに取って代わるのです。

しかも父が兄の方に「祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」と声をかけたあと、兄がどのような態度を取ったのか、書かれていないのです。弟は、心の底から態度をあらため、父の家に迎え入れられました。では兄は、その後いったいどうなったのでしょうか。

私は、兄がどんな行動に出たのか、知りたいのです。私も自分の家庭で第一子長男で生まれました。同じ立場に立たされたとしたら、どのような態度に出るだろうかと考えます。ひょっとしたら今度は兄が、家を飛び出してしまっても知れません。父親に対する自らの忠実さが理解されなかったと思ひ込み、本来あるべき状態を逸れてしまう可能性もあ

ります。

ただ私は、物語の兄が、父親の話を聞いてよく考え直し、自分にできることをして父親を喜ばせようとするのではないか。そう考えてみました。兄に呼びかけられているのは、「本来の場所にいる有り難さを今まで以上に自覚する」ということです。この呼びかけに沿って、兄にさらにできることは何でしょうか。

こんなことは可能かも知れません。もともと父の家の息子二人は、雇い人のように働くことは求められていないはずですが。我が家で起きた感動的な体験を、多くの人に語り聞かせる。そのために人を招き、会食をして、死んでいた弟が父の思いに気づき、生き返ったのだと語り合うことも可能でしょう。兄が望むなら、外に出て弟の立ち返りと父の偉大さを語る旅に出るということも可能です。

このあたりは物語には書かれていません。私はこの「書かれていない物語」は、ルカ福音書が読まれる国、読まれる時代によって自由に描かれてよい部分として余裕を残してくれたのではないか。そう思ったのです。私たちが生きているこの国のこの時代で、父の偉大さと弟の立ち返りを語って聞かせるために兄が思いきって活動するさまを、大胆に描いてよいのではないのでしょうか。

最近、反省することがあります。どこの教会でも司祭たちは「信者が教会に来なくなった」と嘆いています。私はこれは、父親の諭しを聞き入れる前の兄の言葉に聞こえるのです。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。」

(15・29)

たしかにそうですが、司祭がミサのために教会に行くのに、いったいどれくらいの労力があるのでしょうか。田平教会であれば司祭館から15歩かも知れません。そこからすると、すべての信者さんが「ここをたち、父のところに行って言おう。」(15・18) そんな思いなのではないのでしょうか。司祭はまだ遠くにいるうちから駆け寄るべきなのに、その正反対の態度で接しているのではないか。そんな反省を持ったのです。

司祭に、父親の諭しを聞き入れる前の兄の態度が残っているのなら、今の時代にふさわしい「書かずに残してある兄の物語」を実行する必要があると思いました。中田神父ができる「父の偉大さを語り、弟の立ち返りを喜ぶ」態度は何だろうか。よく考えたいと思いました。

黙想会は、立ち帰りの時です。私たちが父の家にこれまで以上に近づき、父の愛に留まって日々を暮らすヒントを黙想会の中で願いましょ。説教師の補佐司教様も大きな犠牲を払っておいでくださいますので、補佐司教様のためにも合わせてお祈りください。